

アジアの刺青慣習と日本の刺青慣習の比較

Comparison of the Asian tattoo Custom and the Japanese tattoo custom

1K06A151

指導教員 主査 寒川恒夫先生

武井 康晴

副査 杉山千鶴先生

【序章】

刺青（いれずみ）とは、針や刃などを用いて皮膚に傷をつけて、墨などの色素を定着させることによって文様などを描く行為、または描かれた文様のことを指す。刺青は文化人類学や考古学においては身体を人為的に変えようとする「身体変工」の一種とされ、割礼、頭蓋変形、纏足、削歯、抜歯など歯牙変工、首の伸長などがこれにあたる。刺青には多くのスタイル、意味、用途、歴史的背景が存在する。慣習として行われる刺青文化は南北アメリカ、シベリア、東アジア、東南アジア、西アジア、ポリネシア、アフリカなど世界中に分布している。またその歴史も古く、エジプトのミイラやアルプス山脈のなかで発見された5000年前の男性のミイラからも刺青が発見されている。日本でも少なくとも弥生時代には刺青をしていたとされる文献があるなど日本にも独特な刺青慣習があったとされる。近年非習俗的刺青文化も非常に幅広く、中でも日本近世に生まれた「和彫り」は構造・美学両面、独特の技術において現代タトゥーの世界では一目おかれる独特の存在である。しかし、いまだに日本では刺青は一部の愛好家にしか知られておらず、流布しているのはヤクザ＝刺青など曖昧なイメージばかりで、ほとんどが刺青に対して否定的であることが多い。今日、刺青はタトゥーと呼ばれ、渋谷、原宿、新宿など目にするのは難しくはないし、誰でも一度は若者がタトゥーをしているのを見たことがあると思う。タトゥー専門雑誌などもあり、様々なジャンルのタトゥーが存在することがわ

かる。これらの雑誌などをみていると、不思議な幾何学模様の刺青を施した若者が多いことに気づく。これらは「トライバル」と呼ばれ、ポリネシアなど南西諸島の刺青慣習にインスピレーションを受けて現代化したジャンルの刺青であり、今日非常に人気がある。もともと慣習だった刺青文化が新たにアートとして戻っている。日本の周りの国や島を見るとさまざまな共通点も見られる。これら諸地域の刺青習俗を比較することでアジア・太平洋諸島における刺青慣習の特徴を探った。

第一章では刺青そのものにおける導入が中心であり、本稿における刺青の言葉の定義や刺青の主な技法、歴史が中心となっている。

第二章ではアジアやポリネシアなどの国々における刺青慣習を部位や文様、用途などを文献等から写真を掲載することで整理している。また台湾、アイヌ、琉球の刺青慣習の共通性についても取り上げている。また他アジアからフィリピン、インド、ビルマを取り上げ、現代のトライバルのジャンルにおいて人気の高いポリネシア、ミクロネシアの刺青慣習を取り上げた。また日本の和彫り文化についてもここで取り上げている。

第三章ではこれまで取り上げた諸地域の刺青慣習を比較することで得た結論を列挙する。

なお、本稿では針で突いて墨を入れる刺突文身を中心に扱うため、メラネシアやオーストラリア、アフリカ・スーダンのヌバ族が行う、皮膚に傷をつけた後に異物を挿入したり何かを塗ったりして傷の治りを遅くし、ケロイド状の肌

をつくりだしたりわざと肌を盛り上がらせる癍
痕（はんこん）文身（スカリフィケーション）
は取り上げないものとする。